三重版

能登地震

「ごみ収集が生活に必要不可欠」

県清掃事業連合会 活動語る

㊤避難所にたまったごみを収集する清掃員ら
㊦家屋倒壊のがれきで狭まった道を進むごみ収集車
＝いずれも石川県輪島市で（進栄サービス提供）

県内の清掃業者でつくる「県清掃事業連合会（三清連）」は、能登半島地震の被災地で避難所などにたまったごみを収集するボランティアに取り組んだ。被災地ではごみ焼却場の被災で、普段の生活で出る一般ごみの処理も追いついていない。石川県輪島市や穴水町で作業した進栄サービス（四日市市中野町）の伊藤進相（しんすけ）社長(30)は「ごみ収集が生活に必要不可欠だと改めて実感した」と語る。

災害発生時には、環境省と関連団体でつくる「災害廃棄物処理支援ネットワーク（D・Waste-Net）」が廃棄物の処理を支援することになっている。能登半島地震では同省が全国清掃事業連合会に協力を依頼し、各都道府県の連合会が代わる代わる被災地へ入ってごみ収集を担っている。

三清連では1月29日～2月3日、伊藤さんら同社の2人と三功（津市戸木町）の片野宣之社長＝三清連会長＝ら3人が被災地へ向かった。

一行はごみ収集車で金沢市内を拠点に輪島市の避難所や穴水町のクリーンセンターなどを回り、集められた一般ごみを回収した。現地のごみ焼却場は被災して使えないため、収集車満載の3～4トンを集めると金沢市の焼却場まで引き返して処理していた。

特に輪島市では家屋倒壊で道が狭まっている中を進み、避難所へ向かった。伊藤さんは「避難所の管理者から『ごみの処理が一番困っていた』と聞いたとき、ごみ収集の大切さを痛感した」と振り返った。穴水町では稼働を停止しているクリーンセンターや、臨時の集積場にたまったごみを金沢市へ運んだ。

ごみが当たり前のように回収されている日常について、伊藤さんは「ごみ収集が来なかったときにどれほど大変なのかを思い知った。どんなときでも止めてはいけない仕事だと感じた」と使命感を新たにした。

また、ごみ処理が他のライフラインと比べて重視されていないと感じたとして「もっともっと注目されるべき業界。企業としては緊急時に動ける体制をつくり、事業を発展させる必要がある」と語った。

（秋田耕平）